

Library and Information Science 掲載論文の傾向

The Change in the Characteristics of Articles Published In
Library and Information Science; 1963-1986

山 中 忠
Tadashi Yamanaka

Résumé

A content analysis was carried to know the characteristics of “*Library and Information Science*” (*LIS*) published from the Mita Society for Library and Information Science. *LIS* published 342 articles from no. 1 (1963) to no. 24 (1986), and these articles are written by 432 authors. From the view of the subject and the research method used, *LIS* is different from other Japanese library and information journals. A large number of the articles in *LIS* are categorized into information science research and the quantitative methods are used in many articles. After the year 1980, the number of authors per article has increased extremely.

- I. はじめに
- II. 掲載論文の調査
 - A. 調査方法
 - B. 調査結果
- III. 考 察
 - A. 研究主題
 - B. 調査研究手法
 - C. 著 者
- IV. 結 論

I. はじめに

三田図書館・情報学会の刊行する *Library and Information Science* (以下, *Lib. & Inf. Sci.* と略す) は、この度、創刊 25 周年を迎えるに至った。そこでこの機会に、本誌のこれまでの歩みを概観し、特徴づける意味

で、研究の主題、方法等の側面から調査を試みた。

筆者は既に、当誌を含む日本の図書館・情報学の主要雑誌の全般的な概観を行なっている¹⁾が、その全体的傾向に対して、当誌がどのような位置にあるのかを把握することも試みたい。

山中 忠：
Tadashi Yamanaka：

II. 掲載論文の調査

A. 調査方法

Lib. & Inf. Sci. 誌は、Library Science 誌を愛媛前誌としている。調査対象は、この2誌に掲載された論文のうち、講演の記録、学位論文の概要、欧文誌に掲載された論文の抄訳などを除く総ての論文とする。

調査方法は、筆者が前回行った、カテゴリー化の手法を踏襲した形で行なう。すなわち、調査項目は、研究主題、調査研究手法、著者の所属、著者数、図書館研究の際の対象館種であり、カテゴリーは以下のようなになる。

1. 研究主題のカテゴリー

情報学

情報の生産

情報の蓄積・利用

情報学一般

図書館学

情報の蓄積・利用 (提供)

図書館学一般

図書館・情報学

図書館・情報学

書誌学

2. 調査研究手法

計量的手法

社会調査

ビブリオメトリクス

内容分析

記録データの(計量的)分析

非計量的手法

歴史的方法

開発報告

現状報告

論 述

その他の手法

3. 著者の所属

教 員

公共図書館員

大学図書館員

専門図書館員

学 生

その他

4. 著者数

人数で表示

5. 対象館種

公共図書館

学校・大学図書館

専門図書館

図書館一般

B. 調査結果

調査対象となった論文の総数は342論文、著者の総数はのべ437人であった。

1. 研究主題

研究主題に関する調査結果を第1表に示す。

1論文1主題で、342件中、情報学が160件(全体比47%)、図書館学が134件(同39%)、図書館・情報学が48件(同14%)となっており、情報学が最も多くを占める。なお、ここでは、図書館学は情報学の一部、つまり、情報学の中において、直接図書館に言及している部分であることを大前提にしている。

第1表 調査結果：研究主題(件)

研 究 主 題	件 数
情 報 学	情報の生産 21
	情報の蓄積・利用 97
	一 般 42
図 書 館 学	情報の蓄積・利用 74
	一 般 60
図書館・情報学	図書館・情報学 45
	書誌学 3
計	342 342

2. 調査研究手法

研究手法に関する調査結果を第2表に示す。

1論文中、複数の手法を用いている場合には、そのまま複数抽出したため、総件数は351件になった。論述が83件、次いで記録データの分析の63件となっている。計量的・非計量的手法にまとめると、非計量的手法が全体の59%を占め、計量的手法は38%である。

3. 著者の所属

著者の所属に関する調査結果を第3表に示す。

1論文複数著者の場合、総ての著者を抽出した。総数437人で、教員が41%、大学図書館員が22%、学生が

第2表 調査結果：調査研究手法 (件)

調査研究手法		件数	
計量的手法	社会調査	30	135
	ビブリオメトリクス	33	
	内容分析	9	
	記録データの分析	63	
非計量的手法	歴史的方法	54	206
	開発報告	26	
	現状報告	43	
	論 述	83	
その他の手法	その他	10	10
計		351	351

第3表 調査結果：著者の所属

著者の所属	人数	全体比
教 員	180人	41%
公共図書館員	8	2
大学図書館員	95	22
専門図書館員	32	7
学 生	58	13
そ の 他	64	15
計	437	100

13%，専門図書館員が7%，公共図書館員2%の順になっている。

4. 著者数

著者数に関する調査結果を第4表に示す。

1論文ごとの著者数を調べ、人数別にその論文件数、あわせて人数を記したが、1件だけ団体で人数不明のものがあつた(*の部分)。また、1論文あたりの平均著者数は1.27人であつた。

5. 対象館種

研究主題において、図書館学にカテゴライズされた論文で、それがどのような館種について述べているかを示したのが第5表である。

学校・大学図書館に関するものが最も多く(40%)、次いで図書館一般(34%)となっている。

III. 考 察

A. 研究主題

前章で示した調査結果を時系列的にみると、研究主題

第4表 調査結果：著者数

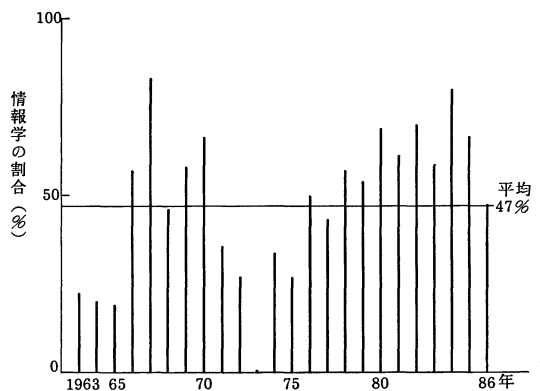
著者数	論文件数	人数
1	285件	285人
2	35	70
3	10	30
4	6	24
5	3	15
6	2	12
*	1	—
計	342	436

*は団体で人数不明

第5表 調査結果：館種

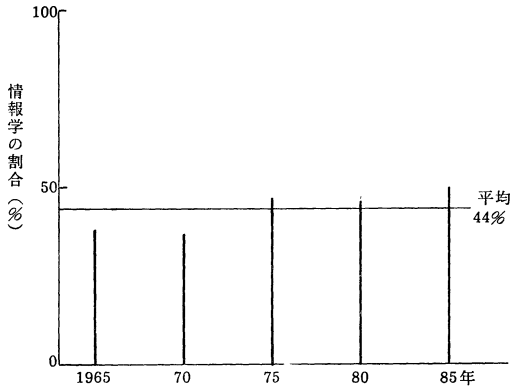
館 種	件数	全体比
公 共 図 書 館	21件	16%
学校・大学図書館	54	40
専 門 図 書 館	13	10
図 書 館 一 般	46	34
計	134	100

の上で、情報学が優勢を占める期間と図書館学が優勢な期間とが比較的顕著にあらわれる。第1図によると、創刊の1963年から65年までは図書館学の主題が多く、66年から70年までの期間は情報学の、71年から77年までは再び図書館学の主題が多く取り上げられている。そして78年から現在に至るまで、また情報学の主題に関する論文が多い。



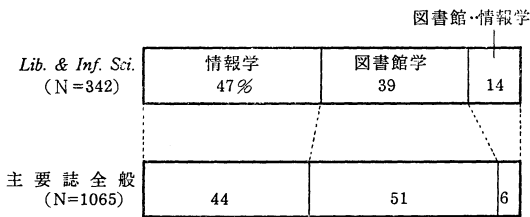
第1図 研究主題に占める情報学の割合 (Lib. & Inf. Sci.)

一方、図書館情・報学の主要誌全般においては、上記のような傾向はみられない(第2図参照)。



第2図 研究主題に占める情報学の割合 (主要誌全体)

また、全年を通しての主題の占める割合を比較すると、主要誌全般の主題傾向が、少し図書館学側に傾いているのに対し、*Lib. & Inf. Sci.* では情報学側に傾いている(第3図)。



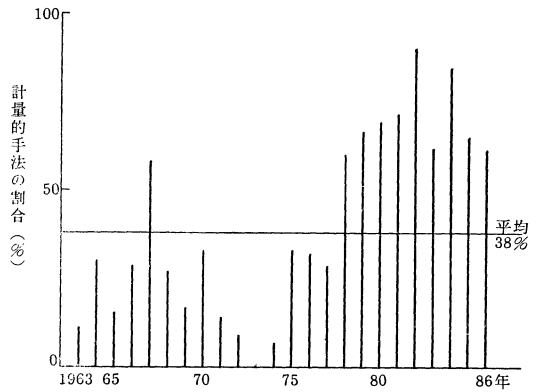
第3図 研究主題の内訳

図書館・情報学分野の雑誌の性格を情報学寄りの雑誌、図書館学寄りの雑誌という観点から分けるならば、*Lib. & Inf. Sci.* は情報学寄りの雑誌といえよう。

なお、図書館学を主題とする論文の言及する館種についての結果は、主要誌全般の結果とほぼ同じで、前回の調査結果¹⁾を確認する形となった。

B. 調査研究手法

調査研究手法に関して、計量的手法の占める割合を年ごとに示したのが第4図である。情報学の研究主題が多かった1966年から70年の期間、78年から86年の期間は、他の期間に比べ、計量的手法の割合が高く、殊に78年から86年の期間はそれが顕著である。

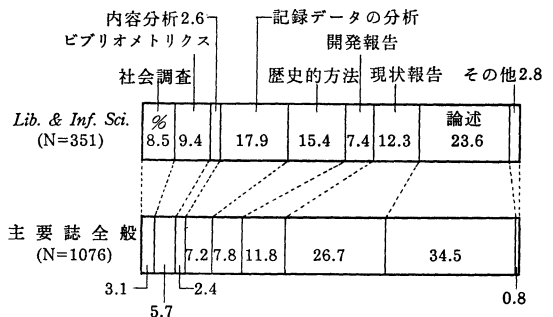


第4図 調査研究手法に占める計量的手法の割合 (*Lib. & Inf. Sci.*)

そこで、計量的手法における情報学と図書館学の関係を見ると、計量的手法を用いている論文135件中、情報学が86件(60%)、図書館学が42件(31%)となっており、計量的手法を用いた論文の数の上下は、情報学の論文の数の上下に、かなりの部分支配されているものと考えられる。

次に、計量的手法を用いている論文の割合に関して、主要誌全般と比較すると、主要誌が18%にとどまるのに対し、*Lib. & Inf. Sci.* は38%になる。これは研究主題上の情報学の割合における両者の差以上にひらきがある。主要誌全般において、計量的手法中、情報学と図書館学がどのような比をみせるかについては末調査のため、検証には至れないが、上に述べたことから、*Lib. & Inf. Sci.* に掲載される論文は、図書館分野でも計量的手法を用いるものが、主要誌の平均より多いという仮説を提示することができる。

これまで、計量的・非計量的といった大項目でみてき



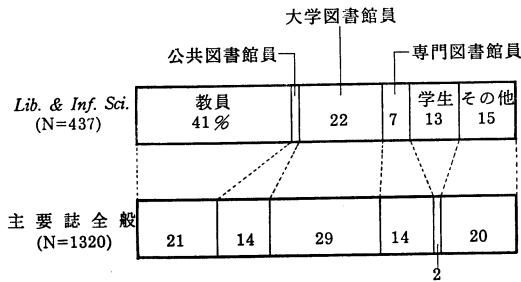
第5図 調査研究手法の内訳

たが、今度は小項目に視点を置き、両者の比較を行なった(第5図)。Lib. & Inf. Sci. は主要誌に比べ、社会調査、ビブリオメトリクス、記録データの分析、歴史的方法が多くなっている。いずれも、図書館・情報学研究の方法論として、著作に紹介される代表的なものである。そして、そのように紹介されているにもかかわらず、それほど使われていないと前回の調査ではみなささるとえなかったが、今回の Lib. & Inf. Sci. の調査では、かなり多くなった。一方、主要誌に比べ少ないものは、開発報告、現状報告、論述となっている。

この結果は、Lib. & Inf. Sci. 誌の特色あるいは編集方針をよく物語っているといえることができるであろう。本誌 No. 24 の和文投稿規定には、“三田図書館・情報学会の Library and Information Science に投稿される原稿は、図書館・情報学に関する未発表の学術的ないしは技術的研究論文に限る。(中略) 単なる現場報告や現状紹介の記事は採択されない”と掲載論文の性格を打ち出し、限定している。

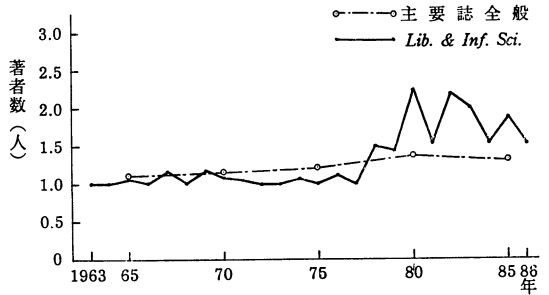
C. 著者

著者の所属の比率を第6図に示す。主要誌全般の傾向としては、教員・大学図書館員主導型であると前に述べたが、Lib. & Inf. Sci. では、それが一層強調され、この雑誌の論文執筆者の特徴がはっきり出ている。また、学生の研究発表の機会も用意されているといえる。



第6図 著者の所属の内訳

平均著者数の変化は、主要誌における平均著者数の増加傾向よりもダイナミックな増加をみせる(第7図)。Lib. & Inf. Sci. では複数の著者による論文作成の傾向は、70年代後半から盛んになってきたようである。それには、大量の調査データの処理も一因と考えられる。



第7図 平均著者数の変化

IV. 結 論

掲載論文の研究主題、調査研究手法等を通して Lib. & Inf. Sci. を眺めてみたが、その結果は図書館・情報学関係の主要誌全般の傾向と異なる部分がかかなり出てきた。

研究主題では、情報学が盛んな期間と図書館学が盛んな期間とが比較的明瞭に分かれ、全体的には情報学の主題が多い。調査研究手法では、個々の手法の占める割合の差が少なくなり、主要誌全般における結果のように報告類と論述に大部分が集中してしまうといった現象はみられなかった。そのため、全体的には計量的手法の割合が高くなっている。著者に関しては、教員と大学図書館員が主体となる形を一層強調した結果となった。また、1論文あたりの平均著者数は、70年代後半以降の増加が顕しい。

1) 山中 忠. 日本における図書館・情報学研究の特徴. Library and Information Science, No. 23, p. 31-44 (1986).